
『死神』の傭兵記

著作権

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『死神』の傭兵記

【Nコード】

N6998Y

【作者名】

著作権

【あらすじ】

最強の傭兵が悪の組織に雇われたら？そんな想像で出来た物語です。

ゲーム準拠ですのでポケスの登場人物は・・・・・・・・・・たぶん出ません。名前は出るとは思いますけど・・・・・・・・

prolog(前書き)

詰まらないとは思いますが宜しくお願いいたします

prolog

朝日が顔を撫で、暖かな光が体を包む。彼は日が昇りはじめてから僅か数秒で起き出す。

傭兵の朝は早い．．．わけではない。しかし、気質故かどうにも早起きをしてしまうのだ。別に寝るのが早いと言っわけではないのだが、遅く寝てもこの時間に起きてしまうのである。

起き出してからまず顔を洗う。これは当たり前のことであり、もししなかったら不潔扱いである．．．．当たり前であるが。顔を洗った後、キッチンに向かい目覚まし替わりのコーヒーを入れるためにお湯を沸かす。ここには本格的なコーヒーメーカーなどないゆえにそこまで美味しくはないのだが、自分で入れたためか愛着．．．ではないが気に入っている。

お湯を沸かしている間にもう見慣れた部屋を見渡す。部屋は1LDK．．．一人ですんでいるため充分な広さがあり、また陽当たりもよくコーヒー同様気に入っている物の一つである。

奇妙な感慨に浸っているとお湯が沸いて、やかんがピーピーとなっていて今にもお湯が溢れだしそうだ。慌ててコンロの火を止め、やかんの中のお湯をコップに移し、インスタントコーヒーのもとを入れる。スプーンでかき回し、口に含む。苦味が口に広がる。インスタントコーヒーであるがやはりうまい。

コーヒーで目を覚まし、しばらく窓の外を眺めていると、突然ポケットに入っているライブキャスターが鳴り響く。ライブキャスターのスイッチを入れ、相手を見る。

「やあ、『死神』^{ライブ}今朝はよく眠れたかな？」

そこにいたのは、自分を雇っている男がいた。その男は濃い藍色の髪、猛禽類のような鋭い目。男はニヒルに笑いかけてくる。

「なに、問題はない。よく眠れたよ、この前贈ってくれた低反発ベツドだったか？あれはいいな。寝心地がいい。」

「そうか、気に入ってもらえてこちらも嬉しいよ。」

男はそう言っただけでまた笑う。こちらにも笑い返す。

「それで、部下を通してではなくライブキャスターなど使ってくるとは何のようだ？」

「クク……わかつているはずだが？」

男が今度は呆れたような笑いを向けてくる。自分のことをよく知っているくせにわざといつてくる男に若干苛立ちながらも返事をする。

「それで？今回の仕事は何だ？お前が直々に仕事の話をするんだ……余程な仕事だろ？」

「画面の向こうの男が一瞬凍りつく。」

（クク……今回はどんな仕事だ？せいぜい楽しませろよ？）

「?????」

画面の向こうで笑っている男に戦慄していた。仮にも組織のトップである自分が怯えていては示しがかないが、それも仕方がないだろう。見るものを凍りつかせる微笑。恐怖を持ったのはこれが初めてかもしれない。

「……………ッ!……………まあいい。今回の仕事は…我々の目的に邪魔になりそうな『四天王』と『チャンピオン』であるシロナの近辺の調査と、『四天王』『チャンピオン』の実力の調査だ」

実際はどうでもいいのだが、もしものことがあっても困る。その予防策といったところか……………『四天王』と『チャンピオン』、連携をとられると厄介だからな。

「……………!……………ほお、『四天王』と『チャンピオン』か……………
……………丁度、退屈していたところだ……………
……………オイタしてもいいのだろうか?」

……………本気か?こいつ?まあ、できるだけ派手ではなければ……………といったことを伝えようとしたところ、何故か嫌

な予感しかなかったので慌てて否定する。

「やめろ．．．．．まだ計画が知られるわけにはいかない、できるだけ隠密に徹底しろ。」

少し上ずってしまった声に動揺しながら伝える．．．．．こいつ相手だとしても調子が狂う。困ったものだ．．．．．

上ずってしまったっている声に動揺しながら伝えてくる男に微笑が浮かぶ。

「フム．．．．．残念だ、まあ仕方がないか。」

本当に残念だ、あの有名な女の『王』チャンピオンと戦えると思ったのだが．．

．．．仕方がない、割りきるか。

「分かった、引きうえよう。で、詳しい日時は？」

「あ、ああ、いつも道理メールで送っておく。．．．．．しくじるな『死神』．．．．」

男が真剣な顔で言うてくる。誰にももの言うていない？俺は．．．

「俺は．．．．．『死神』．．．しくじるわけがなからうが．．．
．．．『アカギ』」

男ーアカギはフツ、と笑い、そうだったなとって通信を一方的に切る。

『死神』．．．．自分の二つ名、恐れられ、畏怖された。

「ま、俺は傭兵。せいぜい楽しませろよ？」
『四天王』
『チャンピオン』

prolog(後書き)

多分、週一更新になります。暇だったらもっと更新できると思いますが(´-`-;)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6998y/>

『死神』の傭兵記

2011年11月21日06時56分発行